

# 思いやりの心を育て、生き生きと活動する「あかはにっ子」の育成 —子ども同士及び家庭や地域との交流を通して—

田原市立赤羽根小学校教諭 森下 正敏

## 1 はじめに

本校では、教育目標として、これからの社会をたくましく生きるために「自他を愛し、夢を抱いて、自ら動き出す人間」に育ってくれることを願い、心身ともに健やかで、知・徳・体の調和のとれた「あかはにっ子」の育成をめざしている。

現在、子どもを取り巻く環境の変化、家庭や地域社会の教育力の低下、体験活動の減少等の中で、子どもの心の活力が弱まってきている傾向が見られる。そのため、自信がもてず、人間関係づくりや自分の将来に不安を感じている子どもたちが増えている。児童数 130 人余りの小規模校である本校でも例外ではない。昨年度に実施したセンターによる実態調査の結果によると、本校児童は、「(問 18)自分のことが好き)」に対して、「よく当てはまる」と回答した児童が非常に多い(資料 1)。一方、「(問 16)自分によいところがある」「(問 17)人の役に立っている)」に対しては、「よく当てはまる」と回答した児童は県平均より高いが、(問 18)の結果と比べると、多くないのが特徴である。

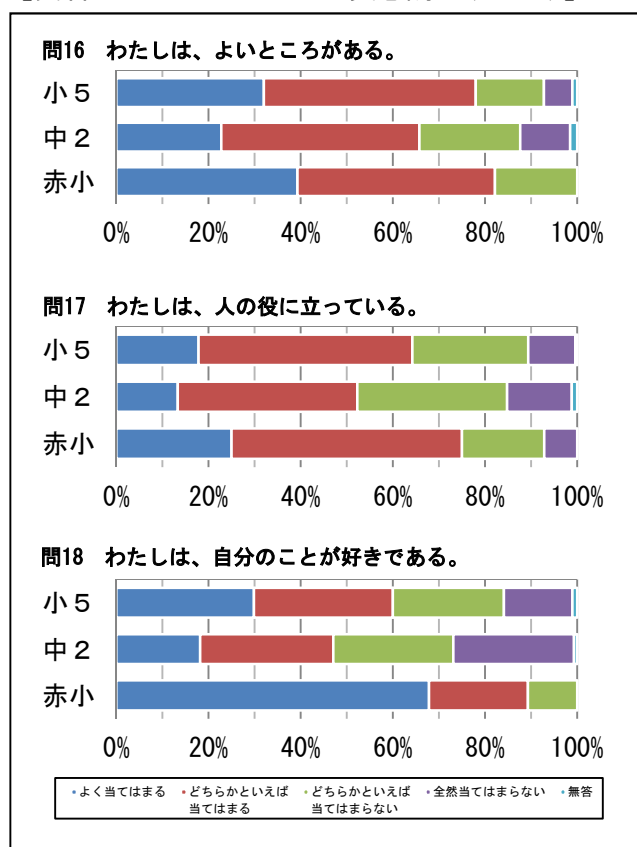
本校児童の課題は、「豊かな人間性」の中核をなす意識の「思いやりの心」と中程度の相関関係がある(問 16)(問 17)の二つの項目(自己有用感、自己肯定感)を高めることである。

自己有用感や自己肯定感は、日常の児童の様子を見ていると、他の人との交流の中で高められているように感じられる。

そこで、学校内だけでなく、家庭・地域との交流を進め、人と人との関係をより親密にすることによって、児童がほめられる機会も増え、自己有用感・自己肯定感を高め、さらには思いやりの心をより育むことにつながると考えられる。

本校では、昨年度から「ふるさと赤羽根」を学習材とした教育活動の推進を図っており、地域との交流の機会がある。そこで、このような交流の機会を、思いやりの心の育成の場として捉え、子ども同士及び家庭・地域との交流を通して、『思いやりの心を育て、生き生きと活動する「あかはにっ子」の育成』を推進していきたいと考えた。

【資料 1 センターによる実態調査(H26.6)】



## 2 目指す子ども像

発達段階を考慮し、目指す子ども像を、1・2年生は、「だれとでもなかよく遊び、助け合うことができる」、3・4年生は、「相手のよさを理解し、相手の気持ちを分かろうとする」、5・6年生は、「相手の気持ちを考えて、適切に行動することができる」とし、思いやりの心をもって、生き生きと活動する子どもの育成を図ることとした。そのために、以下のように考え、実践を推進する。

学校内での児童間の交流を推進したり、家庭・地域との交流を推進したりすることにより、児童の自己有用感や自己肯定感が高まり、思いやりの心が育まれ、集団の向上のために進んで行動できる「あかはにっ子」が育つであろう。

## 3 手だて

### (1) 学校の中での子ども同士の交流の推進

ア 異学年交流                  イ 縦割り班（なかよし班）活動

### (2) 家庭や地域を巻き込んだ交流の推進

ア 全校一斉道徳授業の公開の工夫

イ 全校活動の取組（ア）「ボディボード体験学習」      (イ)「あかはに探検隊」

(ウ)「学級・学校農園」      (エ)「家庭・地域への情報発信の促進」)

## 4 実践の内容

### (1) 学校の中での子ども同士の交流の推進

ア 異学年交流

1年生のスタートカリキュラムにおける活動を、6年生の「思いやりの心」を育む実践する場とした。6年生が、1年生のお世話係となり、登校後の学習道具の整頓を手伝ったり、話や遊び相手になったりして、1年生が落ち着いた1日のスタートを切れるように関わっていた。また、朝の読書の時間には、まだ字の読めない1年生に対して6年生が順番に読み聞かせを行っていた。休み時間に、6年生の足にしがみつくと1年生の姿や、1年生の教室をのぞき込み話しかける6年生の姿がみられた。また、6年生の感想から、つながりの中で頼られることや感謝されることの喜びを感じていることが分かる（資料2）。



＜お世話する6年生＞

#### 【資料2 6年児童感想】

- ・朝の荷物の整理の時にとても頼られた。大変だったけれどもうれしかった。
- ・気をつかうので大変だった。でも、1年生がうれしそうにしていたので、感謝されている感じがした。

イ 縦割り班（なかよし班）活動

毎月1回、「なかよしタイム」という長放課を使って、6年生の企画のもと、なかよし班で遊んでいる。椅子とりゲームをしたり、ドッジボールをしたりとさまざまである。宝探しをしていた班では、「ここだったら見つからないかなあ」とつぶやきながら、宝（鉛筆など）を見えないように隠している何ともかわいらしい低学年の姿が見られ、高学年は、優しさと頼もしさを持ち、低学年は、それを

心で感じる日々を楽しむ場となっている。

## (2) 家庭や地域を巻き込んだ交流の推進

### ア 全校一斉道徳授業の公開の工夫

道徳の授業の一斉の公開授業を通して、保護者が本校で行われている道徳教育を理解し、道徳教育への関心を高めることができ、家庭での子どもとの接し方について深く考える機会となったようである。

今回の実践では、保護者相互の意識の交流や子どもへの関わり等について再度考えてもらうように、授業公開後に、授業の様子やねらいと、資料3のような授業公開に参加した保護者の感想を各家庭に配付した。

#### 【資料3 保護者の感想】

- ・我が子の欠点ばかり気になり、時には怒ったりもしていましたが、今回の授業でよいところを見つめ直す機会となりました。これからももっとたくさん褒めてあげようと思いました。ありがとうございました。
- ・自分も勉強になりました。・・・立って話すみんなの姿からは、緊張が伝わってきました。帰ってきたら自分から何をするか見守ってみます。
- ・ふだんから「許す」姿勢を見せていないんだと、子どもの発言を聞いて感じました。お手本になっていないのに上から目線で色々要求してしまう姿勢ばかりだと痛感しました。また、子どもの寛容な発言に感心しました。

### イ 全校活動の取組

#### (ア) 親子ボディボード体験学習

4～6年生が赤羽根港の東海岸で保護者とともにボディボードを体験している。太平洋の波に戯れ、海の美しさとすばらしさ、ボディボードの楽しさを味わっている。親やサーフィン協会の方とペアとなり、子どものボディボード体験を支援する方法で、学年ごとに実施している。ボディボードの指導と安全確保については、サーフィン協会・PTA委員さん等の協力を得て行っている。



<学習を終え、みんなで撮影>

本実践では、体験学習の保護者案内に、「体験学習のねらい」や「子どもへの関わり方についてのお願い」を付け加えたものにした。子どもにとって本体験学習が、資料4のように、保護者等との温かい関わり場となっており、多くの人たちの支えや思いやりを実感し、感謝する心を育んでいることが分かる。また、ふだんの生活ではなかなかできない環境の中で、親が子どもを褒める機会ともなっている。

#### 【資料4 児童の感想】

- ・お父さんが、「ボディボードが上手にできているね」と言ってくれたので嬉しかったです。  
(4年児童)
- ・サーフィン協会のお兄さんが、たくさんアドバイスをしてくれたので、浜までうまく波に乗ることができ、お兄さんとハイタッチしていっぱい喜びました。(6年児童)

参加した保護者においても、資料5のように、地域とのつながりを感じるとともに、親子の貴重なふれあいの機会という意識をもって参加していることをうかがうことができる。

#### 【資料5 保護者の感想】

- ・海が近くにある赤羽根の子には、ボディボード体験はいいことだと思います。サーフィン協会の協力あってのことだし、ふだんあまり行かない子にとっても親と遊べるチャンスだと思います。
- ・赤羽根小学校でしか経験できない行事に参加することができ、今年で最後となりました。毎年、子ども達の楽しそうな顔を見ることができ、私自身楽しく参加することができました。

#### (イ) あかはに探検隊

「あかはに探検隊」と称して、全校児童を6つの縦割りグループに編成し、PTA委員や地域の方の協力を得て、ふるさと赤羽根の自然・産業・文化施設を訪ねるウォークラリー体験を実施した。校区内の施設園芸を見学し、トマトやイチゴを食べさせていただき、農家の人々と交流することで感謝するとともに、働く人々の意気込みを感じ取るばかりでなく、地域の方から褒められる機会となっている。また、高学年は、1年生の手をとりながら「がんばって歩こうね」と声をかけ、低学年の歩くペースであるくなど下級生への思いやりの情操を高める場となった。



<1年生と歩く6年>

赤羽根の海岸清掃を、参加した保護者とともにも全校で協力し合って行うことによって、がんばる子どもを褒める機会となるだけでなく、みんなでふるさとの美しい自然を守る気持ちを高めることができた。

#### (ウ) 学級・学校農園

本校では、子どもたちの「野菜作り」に必要な全ての活動（苗の植付け・栽培・収穫・調理）を、「にんじんの会」という生産者グループに指導していただいている。この農業体験活動を通したふれあいの中で、子どもたちは栽培の難しさや収穫できた喜びを知り、収穫祭を行って、「にんじんの会」への感謝の気持ちを伝えている（資料6）。

#### 【資料6 にんじんの会への手紙】

野さいの育て方を教えてくれてありがとうございます。また、給食の野菜を作ってくれてありがとうございます。これからも長生きして赤羽根小学校に野菜の育て方を教えに来てください。（3年児童）



<にんじんの会と苗植え>

#### (エ) 家庭・地域への情報発信の促進

児童会を中心として、行った人権運動（Hotもつと運動）では、「はじめをなくし、やさしい言葉をかけ合おう」とテーマのもと、運動に取り組む意識を高めるために全校児童で「Hotもつとシール」を名札に貼った。同じシールを地域の施設や保護者にも配付し、学校で行っ



<「Hot もつとシール」>

ていることに協力してもらうようにした。市民館を訪れた子どもたちからは、「あ、ここにも貼ってある」というように自分たちの活動が地域でも行われていることに満足感を感じていた。

## 5 実践のまとめ

資料7は、昨年度のセンターによる実態調査で、自分の自己有用感・自己肯定感の指標となる「(問16)自分によいところがある」「(問17)人の役に立っている」に対して、「当てはまらない」「どちらかという当てはま

【資料7 児童意識調査結果(H27.7)】

		1：よく当てはまる		2：どちらかという当てはまる					
		3：どちらかという当てはまらない		4：当てはまらない					
項目\児童	調査日	A	B	C	D	E	F	G	H
身近な人に褒められる	H26.6	1	2	2	4	4	1	2	2
	H27.7	3	2	1	2	2	2	1	3

らない」と回答をした8人の児童について、本年度の7月に再調査したものである。児童A以外の7人の児童に「当てはまる」「どちらかという当てはま

る」という向上が見られた。7人のうち6人の児童の共通点は、身近な人に褒められているという意識が継続して高かったり、高まったりしている点であった。

異学年との交流や、共通理解を図った家庭・地域の交流によって、子どもの認められているという意識が高まり、子どもの自己有用感・自己肯定感が高められたと考えられる。

更に高めるためには、児童の取り組む姿や思いを家庭・地域に広めていく必要があるとともに、子どもたちの活動に対する家庭・地域からの賞賛等を、子どもたちへ還元していくような学校と家庭・地域での意図的な情報のキャッチボールのさらなる推進が課題である。

## 6 おわりに

本校児童は、「自分にはよいところがある」「自分は人の役に立っている」「自分のことが好きである」という意識が県平均と比べると、とても高い。これは、本実践で明らかになった子ども同士や家庭・地域との交流が、日頃の学校生活の中に根付いていることが一つの理由とも考えられる。

この自己有用感や自己肯定感を更に高めるためには、さらなる交流の工夫・促進が必要と考えられる。時代の流れとしては、人と人との関係が希薄になっていく傾向は進んでいる。そんな時代であるからこそ、学校の存在が大きいと感じる。学校・地域・家庭が協力する大切さを非常に感じている。また、行事等だけでなく、子ども同士の交流が活性化されるような学習活動（アクティブ・ラーニングなど）を積極的に行い、一日一日が、自己有用感・自己肯定感を高めることのできるように取り組んでいきたい。そして、思いやりの心を育てていきたい。